

宗教感話

「一書の人 (homo unius libri)」と ウエスレー図書館

大学非常勤講師
下北沢ナザレン教会牧師
坂本 誠
SAKAMOTO Makoto



ジョン・ウエスレーの銅像がある青山学院大学で最初に教えたのが2005年のことでした。それ以来、今年度で18年目を迎えます。青山学院大学の施設、建物で最も印象に残っているのはどこかと聞かれれば、迷わず、以前間島記念館の3階にあったウエスレー図書室だと答えます。現在は短大校舎の地下に移っているのですが、博士論文執筆中に大変お世話になった図書室です。ここはウエスレーに関する資料、メソジスト教会に関する資料の宝庫です。

宗教センターの皆様は、とても感じがよく、使用を願うと、いつも鍵を貸してくださり、冷暖房をつけてくださいました。間島記念館は、私にとってはとても愛着の深い場所であり、神の臨在を感じる場所です。ウエスレー図書室に

入ると、整然と図書が並べられ、その中にウエスレー・メソジスト関係の諸書がずらりと並んでいます。私は片っ端から借りては、コピーをとり、大切に保管してきました。いつかきつと役に立つ日がくると信じて通い続けた日々が懐かしいです。図書室のおかげで論文を執筆できたと言っても過言ではありません。

この図書室に入ると、何かウエスレーが語りかけてくるようで心が震えるのです。ウエスレーは組織的な神学書をほとんど残していません。しかし、ウエスレーの思想は、残された151の説教、手紙、日記、日誌から読み取ることができます。このどれをとつてもウエスレーの理解には一貫するものがあります。それはウエスレーの語る「一書の人」という表現で

を続けていました。「一書の人」というのは聖書しか読まないということではありません。自分の思想の中心に聖書を据えて展開するということを心がけてきたのです。

私はウエスレーの有名な置物を所有しています。それは馬に乗ったウエスレーが彫られた彫像です。巡回伝道をしつつ、どこに行くにも、ウエスレーは馬上で読書をしました。晩年になるとさすがに馬に長時間乗るわけにはいかず、馬車仕立てにしてその中で読書をしたのです。

ウエスレーは、ロンドン、ブリストル、ニューキャッスルを中心に、求めに応じて馬や徒歩で町々を巡り、各地で説教し、メソジスト運動の形成を行っていきます。生涯を通じて彼が旅行した距離は約35万キロメートル、50年間で4万回を超える説教をしたと伝えられています。彼の精力的なエネルギーの源は聖書であり、そこに書かれている愛の完全を目標に生涯を貫き通したのです。ウエスレーの思想と行動には一貫性があったのです。ウエスレーは聖書の言葉を、その生活そのものにしようとしたのです。なぜなら聖書の言葉こそ、人を真実に生かすものであることを教えられたからです。ウエスレーの説教を何度読み返しても、聖書の引用に満ちています。まさに一書の人であったことがわかります。

特に、最も重要なみことばである「神を愛する、隣人を愛する」(マルコによる福音書第18

章28〜34節)ことをウエスレーは一生涯の目標として歩んできました。これこそが私たちの営みの頂点であり、まさにイエス・キリストが神を愛し、人々を愛されたように、私たちもまたその目標に向かって歩むのです。ここにこそウエスレアン(ウエスレーの信仰に学ぶ人々)の正道があります。そのためにイエス・キリストは贖いを完成されました。ここに至らない教理や信仰は空しいことを、ウエスレーは自分の経験から知っていました。

ウエスレーには、4つの支柱があると言われています。聖書、伝統、理性、経験です。「ウエスレーの四辺形」と呼ばれるものですが、この4つの柱の中心が聖書です。例えば、ウエスレーは野外説教をするようにジョージ・ホイットフィールドに依頼されます。野外説教をすることは、伝統的には英国国教会のハイチャーチの立場にいたウエスレーには当初考えられないことでした。そこで彼は冷静に順序を立てて思考します。聖書的には、野外での説教はイエスもなさったことでしたから大丈夫です。ウエスレーはそのことを「神の啓示から離れた啓蒙主義的な理性」ではなく、「聖書を理解するための理性」を用いて考えました。そしてそれをトライしてみるのです。体験の神学です。ある人はこれを実験の神学とも呼びます。聖書のみことばを中心に据えながら、ウエスレーはその中で信徒説教者の起用、即興の祈りなどを加味し

て礼拝を考えてきました。その結果、彼の中に野外説教という手段を神が大いに用いられた確証が与えられます。一度確証を得たら、それをどこまでも追求していきました。この包括的な実践性こそがウエスレーの魅力です。

このことは、今日の私たちの生き方に密接に結びついています。この3年間、コロナ禍で様々な判断をしてきました。オンライン授業が中心となり、チャペルで讃美歌を歌えない日々が続きました。しかし、チャペルの灯は続き、今日に至っています。そのような中でウエスレーはもう一度、時代を超えて「一書の人」の価値を示してくれていると思います。ウエスレーの精神がつまんだ文獻が多くあるウエスレー図書室は青山学院の財産であり、残すべき遺産です。

下北沢ナザレン教会には多くの青山学院大学の皆さんが礼拝レポートを書きに来てくれています。多い時には20名ほどの学生が集います。その中の学生の一人が洗礼を受け、現在は信徒として活躍してくれています。また、以前第二部(夜間部)でキリスト教概論を教えていましたが、その時の卒業生とは毎年クリスマス同窓会を持っています。大学において聖書のみことばを学び、礼拝ができる、ウエスレーの精神が息づいた青山学院大学は、どのような時代に直面しようとも、この精神を忘れずに歩んでいただきたいと願います。